ぼくが狼だった頃

●さかさま童話史●

寺山修司

文春文庫

文春文庫

173—2

ぼくが狼だった頃

定価はカバーに表示してあります

1982年5月25日　第1刷
1986年7月15日　第5刷

著　者　寺山修司
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

文春文庫

ぼくが狼だった頃

さかさま童話史

寺山修司

文芸春秋

ぼくが狼だった頃／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

さかさま童話史

ぼくが狼だった頃

アンデルセンの「はだかの王さま」はすごい肉体美だった 9
「狼が七匹の子やぎ」に冷たくされる理由 11
「ブレーメンの音楽隊」は養老院にゆくべし 18
「人形の家」のノラは家出したら娼婦になるだろう 25
「ピノキオ」の鼻を切り落す方法 32
だれもが「ドン・キホーテ」になりたがる 40
ウィリアム・テルの二本目の矢の行方 47
「母をたずねて三千里」は遠すぎる 54
「青い鳥」が何羽いたらこの世界はしあわせになるか 60
「長靴をはいた猫」はもしかしたらモーレツ社員のはじまりだった 67
ガリバー船長と六フィートの乳房 74
「ほら吹き男爵」は中世の広告代理人 82
90

書き直し名作
アンデルセンおじさん、ごめんなさい　97
おやゆび姫　99
読者の書いた続篇　109
ピノキオ　116
読者の書いた続篇(一)　127
読者の書いた続篇(二)　137
イソップ物語　142
赤ずきん　150
赤い鳥辞典　171
マザーグースによる女性論　195
かぼちゃ食いのピーターの性生活　197
かぼちゃ食いのピーターのベッドルーム　211
かぼちゃ食いのピーターはこんな女の子がきらい　217
あとがき　219
解説　高橋章子

単行本　昭和五十四年三月文藝春秋刊

ぼくが狼だった頃

さかさま童話史

初出誌一覧

さかさま童話史　「シグネチュア」昭和五十二年六月号〜昭和五十三年五月号
書き直し名作　「ビックリハウス・スーパー」
おやゆび姫　昭和五十二年二号
ピノキオ　昭和五十二年三号
イソップ物語　昭和五十三年五号
赤ずきん　昭和五十二年一号
赤い鳥辞典　「野性時代」昭和五十二年三月号
マザーグースによる女性論
かぼちゃ食いのピーターのベッドルーム　「婦人公論」昭和五十一年八月号
かぼちゃ食いのピーターはこんな女の子がきらい　「いんなあとりっぷ」昭和五十三年八月号

さかさま童話史

ぼくが狼だった頃

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

アンデルセンの「はだかの王さま」はすごい肉体美だった

愛される王さまになる法

アンデルセンの「はだかの王さま」を読んで、私はすっかりこの王さまが好きになってしまった。

はだかの王さまは自分がはだかだということを知っていて、一寸みんなを驚かしてやろう、と思ったに違いないからである。

もともと、この王さまはファッションに異常に興味がある人だから、流行にさとく、人々の心を見抜いている。マキャヴェリの「君主論」などもちゃんと読んでいて、「自分はおそれられる王さま」になるのではなく「愛される王さま」になるのだ、と方針をきめておられたのであろう。権力者は愛されるためには、ときどき滑稽な失敗をしてみせる必要がある。だが、まがりなりにも一国の王さまともなれば、政治上の失敗は許されない。

そこで、当然、素行の方で人々を笑わせてみようと思いたったというのが、このお話の真相で

あった。

この王さまははじめから自分がただの権力者である、ということに満足していなかった。先王が戦争で早死にしたため、母親っ子として育てられ、過保護で軟弱。戦争よりも平和が好き、会議や狩猟よりも「きれいな服を着る」ということの方が好き、というお人柄であったが、そのことは、自分を「王さまらしくない王さま」にしようという御苦心のあらわれであった。王さまは、トランプのハートのキングのように、王冠をつけて髭をはやし、いかめしい勲章をつけた「王さま」というものに反抗していたのである。

「わたしは、シンボルなどになりたくない」

というのが王さまの口ぐせで、人間らしく生きるために、戦争や、搾取のための押しつけがましい法律を一切やめて、たのしい国を作りたい、という考えをもっておられた。だから着るものにしても、王室おかかえの衣裳係の作るもっともらしい王さま用の服を一切身につけず、町の洋服屋から買ってきた洋服でまにあわせるようにした。ところが、大きな国であるから、洋服屋も五軒や十軒ではなく、何百軒もある。そのなかの、たった一軒の洋服屋の作ったものだけを着ると、その洋服屋は、たちまち「王室御用」ということで有名になってしまう。そこで、平等を愛される王さまは、国中の洋服屋ぜんぶから一着ずつお買いあげになってそれを片っぱしから着ることにした。

アンデルセンは、そのことを、

「とにかく王様は、一日のうち一時間ごとにちがった洋服に着かえるのです。ですから、よその国ならば、王さまは会議に出ていらっしゃいます、というところを、この国ではいつも、『王さまは、着がえなさっておられます』と言うのでした」

と書いているのである。

神さまだって目に見えない

ところで、この王さまのところへ、他の国から「美しい洋服」を売りにきた二人のうそつき、というのは何者だったのだろうか？　一説によると、彼らは競争国のスパイだということになっている。彼らは、王さまの行状を自国に報告するため、できるだけ王さまに近づき、しかもできるだけ長く滞在できるように、仕立て屋を名乗ってきた。だが、べつの説によると、彼らはただ、ひともうけしようと思ってやってきただけで、他意はないというのである。

しかし、彼らを宗教家か詩人だと見る説も無視する訳にはいかないだろう。彼らは、「神さま」や「美」というものが観念の産物であって、肉眼では見えないものだということを啓蒙するため、わざわざ、ソクラテスまがいの問題をだして、王さまとその周辺の人たちをなやましたのだ。そうでもなければ、四十すぎの大人たちが、見えない洋服を、口をそろえて「みごとじゃ」とか

「まことに美しいのう」などと、言うわけがないからである。

実際、私たちの周辺には、目に見えないものでありながら、しかし価値をもっているものが少なくない。そうしたものをすべて、「見えないから役に立たない」と言ってしまったら、文化などは一燼の灰に帰してしまうことだろう。

二人の仕立て屋を名のる男たちと王さまの「見えない服」をめぐる問答は、いわば哲学問答であって、「見えない」のに「見える」と言った側近の大臣たちは、よくあるスノップである。わかりもしないピエール・シェフェールの電子音楽や、ステーブ・ライヒの現代音楽を「感動的だ」とか「すばらしい」とほめそやす輩と、大してかわるところがないのだが、やさしい王さまは、それも彼らの向上心として、評価して、おられたのであろう。

アンデルセンのはだかは見たくない

アンデルセンの「はだかの王さま」のさし絵を見ると、描かれてある王さまは大抵、でっぷりとふとって、腹がつきでた中年男である。

しかし、これは全くまちがいであって、実は王さまはかなりの美貌のナルシストであったと見るのがほんとうである。

腹のつき出た中年男が、一時間おきに衣裳をかえるというのも、ユーモラスではあるが、しかし、話のはこびからすれば、王さまは自分の裸体に自信があって、「王さまにふさわしい肉体」

と自負していたことは間違いない。シェークスピア劇に出てくる王侯たちは、市民のはだかを「汗をかいて、小韮の匂いがする」と言って笑うが、この王さまはその点、よほどの自信があったように思われる。

古代では、王さまのはだかに対して、下層の市民のはだかは、しばしばふざけの道具にさえ用いられていた。マルチアリスの寓詩などを読むと、王さまが家来をいましめのためにはだかにして曰く、

汝は陰茎を浄めねばならぬ
ただし清浄でかぼそい、
わしの陰茎ではなくて
焼けたエルサレムから貢物を
納めにやって来る男の
あの凄いやつを

私は、王さまのが「清浄でかぼそかった」か、それとも「あの凄いやつ」だったか想像できないが、はっきりしていたことは、王さまが自分の陰茎にかなりの自信を持っていた、ということである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong